

# 中務内侍日記と京極為兼

久松潜 一

一  
近く弁内侍日記と中務内侍日記との詳細な注解が玉井幸助博士によつてなされたことはわれわれの喜びであつた。そのうち、中務内侍日記には京極為兼やその姉為子のことや屢々出て居る点から、為兼の歌論に関心を有する私にとつて一層注目された。それを讀んだ時に得た一、二の考を記して見たい。

弁内侍と中務内侍とはいづれも宮廷に仕へて居り、それらの日記は中世の宮廷女流日記と言へる。さうして形態からいふと弁内侍日記が私家集的形態を有するに對して、中務内侍日記は散文的性質の多い女房文学である。中務内侍は年代からいふと弁内侍より三十年ほど遅れて居る。弁内侍は後深草が東宮であられ、ついで御位に即かれた頃に仕へてゐるが、中務内侍は後深草院の皇子にあたられる伏見天皇に仕へてゐる。日記は弘安三年（一二八〇）からはじまつて正応五年二月（一二九二）に病のため里にかへるまで、十二年間の宮廷奉仕の間の日記である。伏見天皇が後宇多天皇の御代に東宮であられた頃から仕へ、正応元年に御位に即かれてからも五年ほど

仕へてゐる。中務内侍は玉井氏の研究によつて藤原経子が本名であることが知られた。それは後深草院の御記に正応元年三月十五日伏見天皇の御即位式の条に「劔璽内侍高階典子、藤原経子」とあるが、この点を中務内侍日記によると

御劔は勾当給はる。璽はこれの役なり。

とあるから高階典子が勾当内侍であつて、経子が作者である中務内侍であることがわかる。

髪上の内侍は勾当とこれ新内侍なり

とあつて中務内侍はこの頃、内侍になつたのであらう。

次に劔璽の内侍二人 左勾当  
右はこれなり

ともある。中務内侍は璽をささげたのである。この経子は藤原永経の娘である。公卿補任によると永経は永仁二年四月十三日に従三位になつてゐる。筑後守や尾張守を経て中務大輔、修理権太夫、宮内卿になり、正応五年に宮内卿を辞してゐる。父が中務大輔になつたから中務内侍と言はれたのであらう。

中務内侍伝は後深草院の御記や勅撰集に歌の見える外はあまり知られず、この日記は内侍を知る上にも意義が大きい。日記によると伏見天皇が東宮の頃には、父君の後深草上皇の居られた富小路殿に

住まれたので、そこに仕へてゐた。内侍になつてからは勾当内侍と  
ならんで記されてある。また新宰相といふ女房は作者が病のため里  
にこもつてゐる時にも歌を贈答して居り、正応五年作者が退出する  
場合にも新宰相殿が

散る花のなごりのみこそなげかるれまたこん春も知らぬわが身に  
といふ歌を贈り、これに対して中務内侍が

ことしはた花ふく風もいとほれずたゞわが身をもさそへと思ふに  
と答へてゐる。この新宰相は勅撰作者部類に、

#### 伏見院新宰相左中将藤原親忠女

とある。玉葉集、続千載、風雅、新拾遺に二十七首の歌がある。中  
務内侍が後宮を退いた年は父が宮内卿を辞した年であるから、内侍  
が退いたのも病のためのみではないかも知れない。

また大納言殿といふのが伏見天皇が東宮であられた頃から見えて  
ゐるが、これは京極為兼の姉妹（恐らく為兼の姉）の事であること  
は玉井氏の考証された通りである。作者とも常に歌を贈答もしくは  
唱和してゐる。たとへば弘安十一年三月十六日に夜ふけしづまつた  
時に清涼殿へ月にさそはれて花見にいでた時、大納言殿が

池の花のおもかげ月にさだかにおぼえて恋し。ここのへになる花  
の色、あかで昔や恋しかるらんとおぼゆれど、それにつけてもふ  
りにし昔は思ひ出でらるるを、忘れじといひしその世の友はなき  
もあるにこそ。ひきかへたる雲の上、草のかげにや思ひやるら  
ん。かかるなさけのついでには忘れぬおほくしのばれんとやいひ  
おきつらん。などいふに舟にのらんとて池のみぎはなる花の下に  
月のかほのみまぼられてしばしあるに、大納言殿あはれにこの世

ならでも思ひいでつらんやとてあれば、

月にとひ花にかたりてしのぶるをまたあはれなる人もありけり  
つとめて大納言

年をへてけふをかならずちぎりこしひとしもなどかとまらざるら  
ん

御かへし

春をへてかはらぬ花の色なればさこそみし世の友とこふらめ  
いつともあはれはたえでありながら忘るなといひしけふぞ悲し  
き

これを見ても作者は大納言殿（為子）から信頼されてゐたことが知  
られる。

中務内侍が伏見天皇に仕へてゐたことは玉葉歌壇との関係を見る  
上にも注意される。

伏見天皇は為兼を重んじられ、為兼は伏見天皇の後宮にも歌の指  
導者として力を有してゐた。永福門院は中宮として歌にすぐれてゐ  
られる。為兼が後宮に勢力を有したのには為子の仕へてゐたことに  
大きな関係があるであらう。

その場合中務内侍の歌は玉葉風として見るべきであらうか。中務  
内侍日記には歌が百五十四首（その他に長歌二首、連歌四首ある）  
ある。その中、内侍の作は百十四首と二句ある。しかし玉葉集には  
内侍の歌は二首とられてゐるのみである。その二首は日記には見え  
ない。それから見ると玉葉の女歌人としてはそれほど重んじられな  
かつたともいへるが、これは後にも、言ふごとく内侍の仕へてゐた  
頃はまだ為兼も若く玉葉歌風の形成される以前とも見られることを

考慮に入れる必要がある。為子は勅撰作者部類によると

続拾遺 三首（前右兵衛督為教女）

新後撰 九首（院大納言典侍）

玉葉 五十七首（從三位為子）

風雅 三十首（從二位為子）

新千載 六首（從二位為子）

新拾遺 六首（從二位為子）

新統古今 二首（從二位為子）

と百十三首も勅撰集にとられて居る。玉葉集に五十七首もとられてゐるに對して中務内侍は二首だけであるのはさびしい感がある。しかし弘安十年北山殿へ御方違の行幸のあつた日に歌會があつたがその時の記述に、

入らせ給うて御會あり、男には左中将ためかねばかりなり。警護のすがたにて参りたるいとやさしく見ゆ。権大納言のすけ殿、新宰相殿、女房三人男三人数にもれぬ身われながら嬉しうこそおほゆれ、還御はほのぼのとあくるほどになりぬれば、雪うちほらふ警護のすがたどもやさしくおもしろく見えたり。

とあるが、権大納言のすけ殿は同じく女歌人親子の事である。為兼、親子らの間に作者も加はつて歌會を行つてゐるから、玉葉集の歌人として中務内侍も相当にみとめられてゐたであらう。

この場合為兼も記されてゐるが、この日記には為兼の事もしばしば記されてをり、東宮であられた頃、左中将の所へ御使を出されて、思ひやるねざめやいかにほととぎすなきてすぎぬる有明の空といふ御歌をたまはつてゐる。

これについて日記には

同じたぐひならん身はげにいかでかうらやましからざらん。ありがたき面目生ける身の思ひいでとぞよそに思ひしられて侍りし。とある。このやうにして中務内侍も伏見天皇の後宮における歌人の一人として、存在を知られてゐたことがわかるし、為兼を尊敬してゐたことも推測される。伏見天皇は東宮時代から為兼とは親しく接して居られたのは為兼の人物や歌才にすぐれたものがあつたためであらう。

## 二

この日記は伏見天皇が東宮であられた年代は一年に一文ほど記してある程度であるが、後宇多天皇が御讓位になり、伏見天皇が即位される頃から精細になつてゐる。御讓位、御即位の儀式の叙述が精細であるのは宮廷様式を知るために重要な資料となる。

中務内侍の文は細やかでその中に哀感がただよつてゐるのは、中世の無常觀の現れともいへる。冒頭の

いたづらにあかしくらす春秋はただ羊のあゆみなるこ、ちしてすゑのつゆもとのしづくに、おくれさきだつためしのはかなき世をかつ思ひながらも、得脱の縁には進まず。みな生々世々にまよひぬべき人間の入苦なるぞあさましき。

の文にもそれが知られる。そのやうなしめやかな哀感は全篇にただよつてゐる。

それでも弘安七年三月十七日東宮が終夜の遊びは内侍の心にふか

く植ゑつけられて、それからはこの日のことをいつも思出してゐる。翌年の三月十七日にも

夢にいくらもまさらぬ春の夜もあかしかねぬるねざめにまことや  
ここのこよひ月と花とに夜をあかし侍りしも恋しく、たゞ今のや  
うなるに、ほどなくもめぐりあひぬる定めなき世にならへにけ  
るかなと思ひつづくるを、

とかき、大納言殿（為子）の御つぼねに花につけて

われならぬ人もやここのこよひとて月と花とを思ひいづらん  
といふ歌を送つてゐる。作者は過去を思ひ、過去の思出に生きる人  
柄であつたであらう。それには病弱であつたことも関係があるが、  
時代の影響もあるであらう。

なほ中務内侍の歌で玉葉集にえらばれてゐる歌は、院中務内侍の  
名で

#### 花の歌とて

年をへて変らず匂ふ花なれど見る春ごとにめづらしきかな（春  
下）（国歌大観には「花なれば」とあるが誤であらう）

#### 題しらず

かはる世のうきにつけてぞ古へのあはれなりしも思ひ知らるる  
（恋五）

の二首がある。歌風的に見ると抒情味のある歌であるが、なだらかな表現は決して玉葉歌風といふことは出来ない。もとより中務内侍の後宮を退いた正応五年は為兼が玉葉歌風を創始してゐたかどうかは明らかでない。三十九才になつて居り、その翌永仁元年には勅撰和歌集の御企てがあり、為兼も撰者の一人になつてゐるが、同じ撰

者の一人の為世等と意見が一致せず、中止せられた。それから見ると、為兼はすでに一家の風を開いてゐたとも言へるが、また後宮の歌を指導し、影響を与へるまでに至らなかつたかも知れない。それには為兼の歌を製作年代によつて配列し、その歌風の展開してゆく過程を明らかにしてゆく必要がある。しかし、為兼卿家集は殆んど役に立たないし、勅撰集所収の歌でもたどることは容易でない。玉葉集の撰定されたのは正応五年より約二十年後の正和元年（一一三二）であるから、玉葉歌風の影響をうけなかつたと見られる。さう見れば中務内侍日記に見られる歌もまだ玉葉歌風以前と言つてよい。中務内侍が伏見天皇に信任を得てゐる為兼を仰ぎ見たのも若き為兼であつて、玉葉風の創始者としての花やかな為兼ではなかつたと言へるのである。

このやうにして中務内侍日記に見られる為兼や為子も玉葉集撰者としての為兼より以前の姿であるが、それにしてもこの日記が増鏡などとともに為兼の人間像の一面を見る上に重要な意義を有することは明らかである。

— 慶応大学教授・文博 —